

ビタミンC製剤

処方箋医薬品^注

日本薬局方

アスコルビン酸注射液

アスコルビン酸注射液100mg「トーフ」

アスコルビン酸注射液500mg「トーフ」

アスコルビン酸注射液1000mg「トーフ」

アスコルビン酸注射液2000mg「トーフ」

ASCORBIC ACID INJECTION 100mg “TOWA”/ INJECTION 500mg “TOWA”/
INJECTION 1000mg “TOWA”/ INJECTION 2000mg “TOWA”

貯 法：室温保存（注射液100mg、注射液1000mg、注射液2000mg）
冷所保存（注射液500mg）

有効期間：3年（注射液100mg、注射液500mg）
2年（注射液1000mg、注射液2000mg）

注）注意－医師等の処方箋により使用すること

	注射液100mg	注射液500mg
承認番号	22600AMX00092	22600AMX00093
販売開始	1990年7月	
	注射液1000mg	注射液2000mg
承認番号	22600AMX00106	22600AMX00094
販売開始	1966年2月	

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	アスコルビン酸注射液 100mg「トーフ」	アスコルビン酸注射液 500mg「トーフ」
有効成分	1管(1mL)中 日局 アスコルビン酸100mg	1管(2mL)中 日局 アスコルビン酸500mg
添加剤	炭酸水素ナトリウム48mg ピロ亜硫酸ナトリウム0.5mg L-システイン塩酸塩水和物0.5mg pH調節剤（炭酸水素ナトリウム、塩酸）	炭酸水素ナトリウム240mg ピロ亜硫酸ナトリウム4.0mg L-システイン塩酸塩水和物4.0mg pH調節剤（炭酸水素ナトリウム、塩酸）

販売名	アスコルビン酸注射液 1000mg「トーフ」	アスコルビン酸注射液 2000mg「トーフ」
有効成分	1管(20mL)中 日局 アスコルビン酸1,000mg	1管(20mL)中 日局 アスコルビン酸2,000mg
添加剤	炭酸水素ナトリウム480mg ピロ亜硫酸ナトリウム8.4mg L-システイン塩酸塩水和物8.4mg pH調節剤（炭酸水素ナトリウム）	炭酸水素ナトリウム960mg ピロ亜硫酸ナトリウム16.8mg L-システイン塩酸塩水和物16.8mg pH調節剤（炭酸水素ナトリウム）

3.2 製剤の性状

販売名	アスコルビン酸注射液 100mg「トーフ」	アスコルビン酸注射液 500mg「トーフ」
性状	無色澄明の液	
pH	5.6～7.4	
浸透圧比	約4 (生理食塩液に対する比)	約10 (生理食塩液に対する比)

販売名	アスコルビン酸注射液 1000mg「トーフ」	アスコルビン酸注射液 2000mg「トーフ」
性状	無色澄明の液	
pH	5.6～7.4	
浸透圧比	約2 (生理食塩液に対する比)	約4 (生理食塩液に対する比)

4. 効能又は効果

- ビタミンC欠乏症の予防及び治療（壊血病、メルレル・バロー病）
 - ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給（消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など）
 - 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合
 - 毛細管出血（鼻出血、歯肉出血、血尿など）
 - 薬物中毒
 - 副腎皮質機能障害
 - 骨折時の骨基質形成・骨癒合促進
 - 肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着
 - 光線過敏性皮膚炎
- (3)の適応（効能又は効果）に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。

6. 用法及び用量

- 〈アスコルビン酸注射液100mg/1000mg/2000mg〉
アスコルビン酸として、通常成人1日50～2,000mgを1～数回に分けて皮下、筋肉内又は静脈内注射する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。
- 〈アスコルビン酸注射液500mg〉
アスコルビン酸として、通常成人1日50～2,000mgを1～数回に分けて静脈内注射する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

- * 9.1 合併症・既往歴等のある患者
- 9.1.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
 - 9.7 小児等
小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

12. 臨床検査結果に及ぼす影響

- 12.1 各種の尿糖検査で、尿糖の検出を妨害することがある。
- 12.2 各種の尿検査（潜血、ビリルビン、亜硝酸塩）・便潜血反応検査で、偽陰性を呈することがある。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤投与時の注意

14.1.1 投与経路

〈製剤共通〉

- (1) 経口投与が困難な場合や緊急の場合、また、経口投与で効果が不十分と考えられる場合のみ使用すること。また、投与経路は静脈内注射を原則とすること。なお、経口投与が可能で効果が十分と判断された場合には、速やかに経口投与に切りかえること。

〈500mg製剤〉

- (2) 静脈内注射にのみ使用すること。

14. 1. 2 静脈内注射時

血管痛があらわれることがあるので、注射速度はできるだけ遅くすること。

14. 1. 3 筋肉内注射時

組織・神経等への影響を避けるため、以下の点に注意すること。

- ・筋肉内注射はやむを得ない場合にのみ、必要最小限に行うこと。なお、同一部位への反復注射は行わないこと。また、低出生体重児、新生児、乳児、幼児、小児には特に注意すること。
- ・神経走行部位を避けるよう注意すること。
- ・注射針を刺入したとき、激痛を訴えたり、血液の逆流をみた場合は、直ちに針を抜き、部位をかえて注射すること。

14. 1. 4 皮下・筋肉内注射時

注射部位に疼痛があらわれることがある。

* 15. その他の注意

15. 1 臨床使用に基づく情報

本剤は添加剤として亜硫酸塩を含有している。喘息患者では非喘息患者よりも亜硫酸塩に対する過敏症が多く認められるとの報告がある。

16. 薬物動態

16. 1 血中濃度

16. 1. 1 生物学的同等性試験

アスコルビン酸注射液100mg「トーワ」とビタミン注射液100mgをクロスオーバー法によりそれぞれ4mL（アスコルビン酸として400mg）ビーグル犬（n=10）に皮下及び筋肉内に絶食単回投与し、血漿中未変化体濃度について比較検討した結果、両製剤間の生物学的利用率には有意差は認められなかった。¹⁾

18. 薬効薬理

18. 1 作用機序

アスコルビン酸（AsA）は平面的な γ -ラクトン環をもつアシレダクトンの一つであり、この化合物のもつ還元力（抗酸化力）は炭素2位および3位のエンジオール基[-C(OH)=C(OH)-]に起因している。AsAの生理機能の発現には、AsA、モノデヒドロアスコルビン酸（MDAsA）、およびデヒドロアスコルビン酸（DAsA）からなる酸化還元系が重要な鍵となる。AsAが効率的に機能するために、その酸化生成物を再還元する必要がある。²⁾

18. 2 結合織に対する作用

アスコルビン酸は、結合織の主成分であるコラーゲンの生成に関与しており、アスコルビン酸の欠乏は、皮膚、骨、歯、血管等の脆弱化をもたらす。すなわち、アスコルビン酸はコラーゲン中のprolineからhydroxyprolineへの水酸化過程に関与し（*in vitro*）、アスコルビン酸の投与によりコラーゲンの増加がみられる（モルモット）。^{3), 4)}

また、アスコルビン酸は骨形成を進行させ、モルモット実験的骨折の修復機転において治癒的に作用する。^{5), 6)}

18. 3 毛細血管、血液に対する作用

アスコルビン酸は毛細血管抵抗を増強し（マウス）、出血傾向を改善する（モルモット）。^{7), 8)}

18. 4 薬物中毒に対する作用

アルコール中毒患者では、血中アスコルビン酸濃度が低値を示すものが多く、アスコルビン酸の欠乏が起こるとされている。アルコール中毒患者へのアスコルビン酸投与は、低下した尿中アスコルビン酸排泄量を回復させ、血中アルコール濃度の上昇を一時的に抑制する。^{9), 10), 11)}

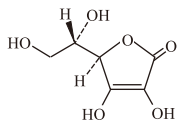
また、ニコチンは副腎皮質を刺激し、副腎皮質ホルモンの分泌を促してアスコルビン酸の消費を増大させる。⁹⁾

18. 5 メラニン色素生成に対する作用

アスコルビン酸は、チロシンからのメラニン生成過程の中で、DOPAからDOPAキノンへの酸化過程を阻害し、メラニン色素の生成を抑制する（*in vitro*）。¹²⁾

19. 有効成分に関する理化学的知見

構造式：



一般名：アスコルビン酸（Ascorbic Acid）

化学名：L-threo-Hex-2-enono-1, 4-lactone

分子式：C₆H₈O₆

分子量：176.12

性状：白色の結晶又は結晶性の粉末で、においはなく、酸味がある。水に溶けやすく、エタノール（95）にやや溶けにくく、ジエチルエーテルにほとんど溶けない。

融点：約190℃（分解）

22. 包装

〈アスコルビン酸注射液100mg「トーワ」〉

1mL×10管

1mL×200管

〈アスコルビン酸注射液500mg「トーワ」〉

2mL×10管

2mL×100管

〈アスコルビン酸注射液1000mg「トーワ」〉

20mL×50管

〈アスコルビン酸注射液2000mg「トーワ」〉

20mL×50管

23. 主要文献

- 1) 社内資料：生物学的同等性試験（注射液100mg）
- 2) 日本ビタミン学会編：ビタミンの事典、朝倉書店；1996：366-367
- 3) Levene C. I. et al. : Biochim. Biophys. Acta. 1972；257：384-388
- 4) Gould B. S. et al. : Ann. New York Acad. Sci. 1960；85：385-398
- 5) Fullmer H. M. et al. : Ann. New York Acad. Sci. 1961；92：286-294
- 6) 梶原 章：最新医学. 1962；17：1429-1446
- 7) 藤田和典 他：日本皮膚科学会雑誌. 1963；73：580-589
- 8) Lee R. E. : J. Nutr. 1960；72：203-209
- 9) 田多井吉之介：日本医事新報. 1966；No. 2190：161-162
- 10) Lester D. et al. : J. Nutr. 1960；70：278-282
- 11) 飯島泰彦：精神神経学雑誌. 1960；62：862-875
- 12) 竹内 勝 他：ビタミン. 1963；28：501-507

24. 文献請求先及び問い合わせ先

東和薬品株式会社 学術部DIセンター

〒570-0081 大阪府守口市日吉町2丁目5番15号

TEL 0120-108-932 FAX 06-7177-7379

26. 製造販売業者等

26. 1 製造販売元

東和薬品株式会社

大阪府門真市新橋町2番11号